木かげの家の小人たち

いぬいとみこ 作
吉井 忠 画

木かげの家の小人たち

いぬいとみこ　作
吉井　忠　画

いぬいとみこ

本名は乾富子。東京に生まれる。日本女子大学一年生のとき、宮沢賢治の作品にふれ、これか児童文学に進むきっかけとなる。その後、保母を志し同大学を中退。

一九四四年、京都平安女学院専攻部保育科卒業。約二年間、保母をする。

一九五七年、「ながいながいペンギンの話」（現在、理論社刊）で毎日出版文化賞受賞。

一九六一年、「木かげの家の小人たち」で第四回アンデルセン賞国内賞受賞。

一九六四年、「北極のムーンカミーンカ」（理論社刊）で第五回国際アンデルセン賞佳作賞。

一九六五年、「うみねこの空」（理論社刊）で第一回児童文芸賞受賞。

一九七二年、「くらやみの谷の小人たち」（福音館書店刊）。東京在住。

吉井　忠（よしい　ただし）

一九〇八年、福島県に生まれる。大平洋美術研究所をへて、一九三六年から七年まで、ヨーロッパで研究。現在は主体美術協会会員。

著書に、「民芸論」（彰考書院刊）「ピカソ」（青木書店刊）「生活芸術」（河出書房刊）「日本民話選」（岩波少年文庫）「きんいろのつののしか」「あかちゃんのさし絵には、」（以上福音館書店刊）などがある。東京在住。

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

木かげの家の小人たち

一九六七年　七月一五日　初版発行
一九八一年一一月一〇日　第二一刷発行

著　者　いぬいとみこ
発　行　福音館書店　郵便番号一〇一
東京都千代田区三崎町一丁目一番九号
電(二九二)三四〇一　振替東京五―一一七六四五

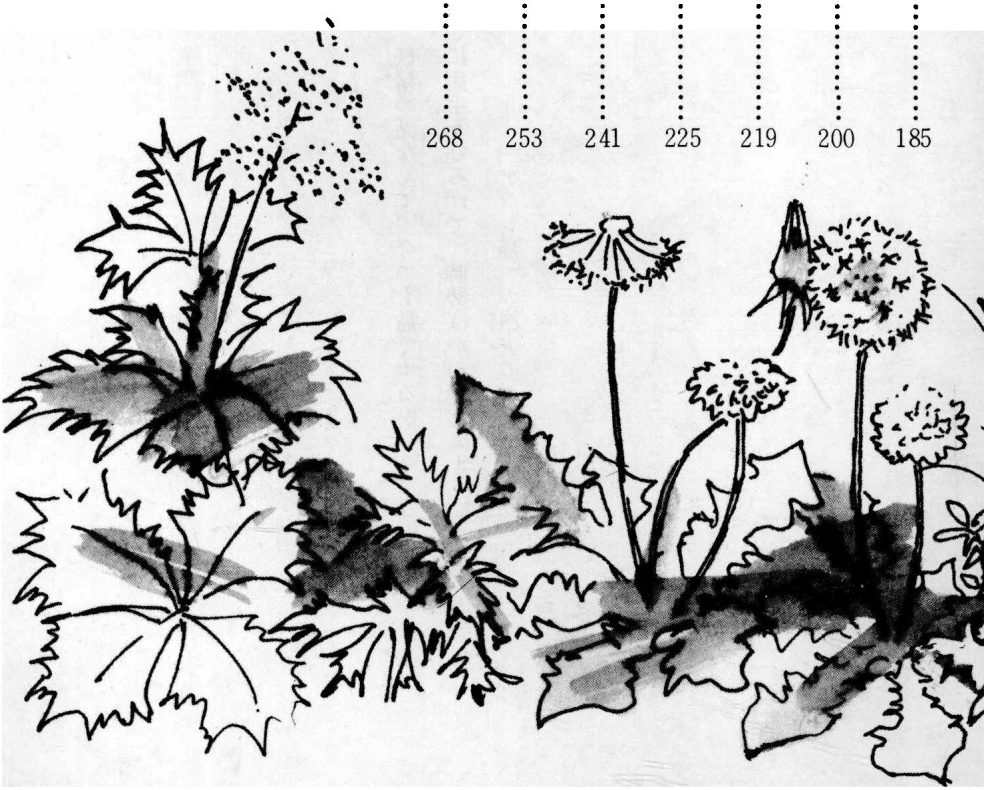
印　刷　精興社
製　本　里岩大九堂
NDC九一三／二八八ページ／一五×二二cm

無理な扱いをしないのに、お買い上げ後一週間以内にこわれたような本がございましたら　お買い上げ月日書店名をご明記のうえ　おそれいりますが　本社にご返送ください。責任をもっておとりかえいたします。

© 1967 Tomiko Inui　Printed in Japan

物語のまえに
本の小部屋……9
ふたりの男……27
妖精のはなし……45
ハトの弥平とロビンとトラと……66
ケヤキの木にはドングリはならない……79
「本の小部屋」さようなら！……97
野尻の家で……121
草刈りの日……142
新しい友だち……156
初　雪……170

ハトの弥平とアマネジャキ……185
さいごのミルク……200
小人たちはいってしまった……219
アマネジャキの宿で……225
「帰ってきて小人たち！」……241
暗い日々……253
ゆりの帰る日……268
あとがき



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

物語のまえに

人はそれぞれこの地上のどこかに「だれもゆけない土地」をもっています。その人自身のいちばんたいせつな、愛するものの住んでいる「ふしぎな土地」を。

ある人はサハラ砂漠のまん中の、砂と砂とがつくり出した小さな谷あいに、「だれもゆけない土地」をもっていました。そこは、その人と星からやってきた小さい王子さまと、バラの花と一ぴきのキツネのほか、けっしてだれもゆくことのできない「ふしぎな土地」でした。

また、ある人は、ヤナギの葉うらが銀いろにひるがえる楽しい川べに、「だれもゆけない土地」をもっていました。ほこりっぽい人里をはなれたその川べには、小さな川ネズミの清潔な家や、ものずきなヒキガエルの大きなやしきが建っていました。

そして、ある夏の夜あけまえ、その人は川ネズミやモグラといっしょに、きよらかな笛の音を耳にしました。その調べは美しくあこがれにみちて川の水のおもてをわたり、その人は野の神、パーンのすがたを、静かにあけてゆくあかつきの光の中にみたのでした。

ぼくのもっている「だれもゆけない土地」——そこにはケヤキの木にかこまれた一軒の家が

建っています。庭にはアンズやクリやイチジクや、サクランボのなる木が茂っていて、大きい男の子と中ぐらいの男の子と、とても小さい女の子が住んでいます。

女の子は五つか六つくらいです。よく晴れた夏の午後の日が、その家の芝生を照らしています。子どもたちはフンスイ式に水の散るシャワーを芝生へもちだして、水あびっこをしています。男の子たちは黒いパンツ、女の子は母親の手づくりの黄いろい水着一つで、キャッキャッとはしゃぎまわっています。シャワーの水が四方へ散って、緑の芝生のあちこちに、小さいニジをいくつも作っています。

小さかったころのぼくが、その庭へこっそり入ってゆきます。その家の隣のぼくの家から、しのび出てきたところです。大きい中学生の男の子と小さい女の子が、大かんげいの身ぶりをします。けれども、ひとみしりする中の男の子は、しかめた顔でぼくをにらみます。

ぼくは「ふうっ」と息をつめて、水しぶきのまくへとびこんでゆきます。

きらめく真夏の日ざしの下のつめたいシャワーのすばらしさ！　ぼくたちは小さいインディアンのように夏に酔って芝生をころげまわります。ぬれた芝草のつよいにおい。なつかしい大地のしめったにおい。しまいには中の男の子も、子グマのようにぼくにからみついてきて、力いっぱいのとっくみあいがはじまります。

それを見ている女の子の目は、はればれと小鬼のように光ります。幸福そうな女の子の笑い

声が、高く高くケヤキのこずえにひびきわたります。

やがて空がくらくなり、ほんものの夕立がやってきて、シャワー遊びは終わりをつげます。はげしい夏の雷が、ぼくの「土地」に鳴りわたると、少女もふたりの兄たちも、くらやみの中に消えてゆきます。小さかったときのこのぼくもいっしょに。

ぼくの「だれもゆけない土地」の季節はいつも真夏です。

あるときはいたずら小僧のぼくが、少女のうちの白イチジクの木にのぼっています。ぼくのうちのヒバ垣をのりこえて、ぼくはどろぼうにやってきたのです。もぐと、つけねから白い乳の出るイチジクの実を、このどろぼうはつぎからつぎへとむさぼりたべます。イチジクの葉がこうばしいにおいをあたりにただよわせます。

旧式な西洋館めいたとなりの家から、小さい女の子が出てきます。

こわいものなしのどろぼうのぼくも、「しまった！」と思い、イチジクの大きな葉かげに顔をかくします。

少女はまっすぐやってきて、尊敬をこめて木の上のぼくにいいます。

――わたしにもひとつ、イチジクとって！

あわれなどろぼうはたちまち、イチジクをもぐために天くだったひとりの天使に変身します。

――ありがと！

と、心からどろぼうに礼をいって、少女は短いかげをふみながら、もときた家へもどってゆきます。くびすじの細い女の子の鼻の上にういていた汗を思いながら、どろぼうはイチジクの枝の上で、青空に城をえがきます。いつかあの少女といっしょに住むべき空想の城を。

夏の入道雲がたかだかともりあがり、ぼくの城も、はてしなく青空の中にひろがってゆきます……

ごらんのとおり、ぼく自身の「だれもゆけない土地」には、星からきた小さい王子もいなければ、きよらかなパーンの笛の音のひびく楽しい川べもありません。しかし、現実にこのぼくが生まれ、そこで育ったぼくの「家」が、空襲で焼けてなくなって以来、そこはぼくにとって、とくべつの「土地」になりました。集団疎開に出かける小学生のぼくが、なつかしくふりかえりふりかえりしていったぼくの家も、その隣のケヤキにかこまれた少女の家も、いまはあとかたもないのです。そして、そこに住んでいた小鬼のような少女に、ぼくは生きて二度と会えることはないだろう……

十何年か、そう思いつづけていたぼくの前に、ある日、ひとりの友人があらわれました。ぐうぜんに、電車の中で顔を合わせたその友人から、ぼくは、あの少女の近況をきかされることになりました。

——あのひとは、きみのことを覚えていたよ。鉄棒の「大車輪」のうまかった隣の男の子に、

ときどき会いたくなるって、なつかしそうに話していたっけ。

とっさにぼくは返事ができませんでした。友人は、かまわずことばをつづけました。

——なつかしかったなあ、久しぶりにあの人と子どものころの話ができて。あの人のほうじゃ、あんまり話さなかったけどね。きみにだったら、もっとしゃべったかもしれない。あのひとはむかしから、ぼくよりもきみのほうがすきだったようだもの。

少女の家をまん中にして、少年時代をいっしょにすごしたその友人は、むかしどおり少しがさつで親切な男でした。

——いちどきみ、たずねてやるといいよ。ほら、住所はここだといっていた。

少女の住所をわざわざ紙きれに書いて、友人はぼくにわたしました。

ぼくは、じぶんの「だれもゆけない土地」へ、他人にずかずか踏みこまれるのがたまらない気がして、もっと話したそうなその友人と別れました。

ほんとうは、少女の近況を、もっともっとききたかったのだけれども。

友人とわかれて帰るみちみち、ぼくはわたされた紙きれを、こまかくいくつにもひきさきました。

（あの子の記憶の中のぼくが、いつも鉄棒の上でくるりくるりとまわっている、乱暴な、いきいきした男の子であるように！　そしてぼくの「土地」の中のあの子が、いつまでも小鬼のよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うな少女であるように！）

こなごなになった紙きれは、ぼくの手から風の中に散ってゆきました。

それから幾月かたちました。

ぼくがつとめさきの机の上で、朝きた郵便物の整理をしていると、その中に小包が一つまじっていました。読者からきた投稿の一つだなと思いながら、裏をかえして差出人の名前をみたとき、ぼくの手はふるえました。

「森山ゆり」とブルーのマジック・インクで書かれたその名まえは、ぼくの「土地」のあの少女のものでした。

ぼくはいそいで封をとき、出てきた大型ノートをひらいて、一つの物語をよみはじめました。

それはあの少女自身の「だれもゆけない土地」の物語でした。

あの子はぼくの「土地」のすぐ近くに、もっともっとふしぎな国をもっていたのです。

ぼくはじぶんの「ふしぎな土地」の知らなかった裏がわを見せられるような気がして、その物語にひきいれられてゆきました。

本の小部屋

ある家の二階に小さな書庫がありました。

うす暗い廊下に面しているその部屋の戸は、めったにあいている時がなくて、入ってくる人をよせつけまいとするように、いつもぴしゃりとしまっていました。その家のほかのどの部屋よりも、そこは地味でもの静かな一角でした。

重たいカシの戸をぎいーっとあけると、その小部屋の三方の壁は、天井までとどきそうな作りつけの本棚になっていて、さまざまな本が、わがものがおにその棚をうずめていました。古めかしい漢文の本のとなりには、明治時代にこの家のおじいさんが愛読したという外国語の本がぎっしり並

んでいました。またそのとなりの一角には、小さな文庫本ばかり、うっすらとほこりをかぶって二百冊ほども並んでいました。

一口でいえばこの「書庫」は、ぶじにつとめをはたした年よりの本たちが、やすらかに眠っている隠居所でした。

そして、この静かな部屋の天井ちかくに、小人たちが住んでいたのです。

天井にあいている明かりとりのまどと、東がわの本棚の上の段とがつくり出す三角のすきま……そこが小人たちの「場所」でした。

ちょうど天井のまどの外には、庭のケヤキの大木が茂った枝をのばしていました。それで夏には緑の葉かげが、小人の家のカーテンのかわりをしてくれましたし、冬には裸の梢ごしに、あたたかい日光がふりそそいで、小人の家全体をサン・ルームにしてくれました。

本部屋特有のほこりとかびと、上質の紙のにおい――この三つのものの入りまじった、重々しいふんいきを別とすれば、この部屋ほど小人たちが暮らしてゆくのにふさわしい場所はなかったのです。

だれひとり、見知らぬ人のやってこない、そしてだれからも「見られ」ずに、ひっそりと暮らしてゆける場所は、ここよりほかめったにありません。

そこで、東京の郊外にあるこの家が、明治の末に建ってまもなく、ここに住むことになったふ

たりの小人は、それ以来なにごともなく、この部屋で暮らしてきました。

それは、もうすこしくわしくいえば、大正二年の夏休みのことでした。イギリス生まれのふたりの小人が、この家のいまの主人、森山達夫のもつバスケットにゆられて、はじめてこの家にやってきたのは。

当時の達夫はかすりの着物をきて、ハカマをはいて学校へかよっている、尋常小学校の三年生でした。

小さかった達夫はその日、横浜から帰国する英語の先生、ミス・マクラクランという人から、そのバスケットを受けとったのです。

ミス・マクラクランは、明治時代の中ごろにイギリスから日本へやってきた教育者でした。横浜のある女学校で生徒たちに英語を教えるかたわら、その学校の寄宿舎には住まわず、ひとりで郊外の家に住み、家の近くの小学生たちに、やさしい英語を教えていました。

二十年の間日本にいて、母国へ帰ってゆく先生は、赤んぼの時代から知っている森山家の男の子がお別れにきたのを知ると、荷物のなくなった家の中へこの小さい生徒をみちびきました。

達夫がいつもこの家へくるたびによろこんで踏んだ動物もようのじゅうたんは、もうどこかに片づけられていました。壁の上にあった絵の額もすっかりはずされて、部屋の中はとても陰気に見えました。

ミス・マクラクランは、すみに積んである荷物の中から、古めかしいバスケットをとりあげると、じぶんのいちばん小さい生徒の手に、しっかりともたせていいました。

――この中にいます「小さい人たち」のために、ミルクを運んでくださいますか。毎日、まどのしきいのところに、一ぱいのミルクを出しておくのです！

とつぜんそういってミス・マクラクランは、おどろいて見ひらいた達夫の目の中を、じっとのぞきこみました。はたち代から日本へきていたミス・マクラクランの亜麻いろの髪には、もう白いものがまじっていました。そして、達夫の目をのぞきこむ先生の目は、ふしぎに深い灰色をしていました。

――タツ森山、いいですね、あなたは小鳥や虫を愛しているし、約束のまもれる少年です。わたくしのおねがいすることを、きっとまもると、約束してくれますか？

ミス・マクラクランはすがりつくような熱心さで、小さい生徒にいいました。

――はい、せんせい。ぼくはミルクを運びます。……ミルクばかりではなく、ときどきはビスケットもあげるでしょう。ぼくの母はビスケットをじょうずに焼きますから。

小さいときから、妖精の話をよく先生にきかされていた達夫には、その「小さい人びと」が何であるかすぐわかりました。そしてミス・マクラクランは、達夫のレッスンのときのような返事をきくとはじめてかすかに笑いました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com